



海外

稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

登録稲門会 検索

現在、約70の海外稲門会が世界各地で活動しています。海外に滞在する際は、現地の稲門会を検索して参加してみましょう。
※一部、活動休止中の稲門会もありますことを、ご了承ください。

会長メッセージ

Jambo！（スワヒリ語で「こんにちは！」）ケニア稲門会会長の高光明博です。皆さんはケニアについて、『沈まぬ太陽』に出てきた地の果てのサファリと貧困の大地といった、偏ったイメージをお持ちではありませんか。人口400万人の首都ナイロビは、日中の最高気温が年中21～28度ととても快適で、ゾウ以外のほとんどの野生動物がいるナイロビ国立公園と、高層ビルや高速道路のある都市が隣接する、とても魅力的な街です。

街でもあります。いわゆる企業の駐在員だけでなく、社会課題解決に取り組むスタートアップに参画している方（実はケニアはシリコンサバンナといわれ、スタートアップが有名です）、起業された方、国際協力機構（JICA）や海外協力隊の方など、老若男女を問わず、皆さんがそれぞれ志を持ってのびやかに活躍されています。校友にピッタリだと思いませんか？ ケニア稲門会も手を挙げて、皆さんの来訪をお待ちしています。

高光明博（1994年政経）

会員からのメッセージ

学生時代、縁あって1年間休学して東アフリカに滞在。その縁があっけか、組織犯罪などの対策に関わる国連機関の職員として、2020年から2度目のケニア生活を送っています。ケニアでは、以前は開発援助などに関わる、いわゆる「援助関係者」が在留邦人の中で多かったのではないかと思います。今では、民間のビジネスで駐在される方々が多く、稲門会を通じて、業界を横断して校友やさまざまな邦人の方々と知り合えるのは、何より刺激となっています。

山口正大（1998年理工）

生きる場所だと思っています。
加賀野井 薫（2012年法学）

大学生の時に、サークルのアイセック（AIESEC）早稲田大学委員会を通じてケニアに足を踏み入れ、現在はJICAの職員として、同国の国造りに携わっています。ケニア稲門会に関わるたびに、校友の諸先輩方の導きや、世界中で活躍する学友から受ける刺激があったからこそ初心を忘れずに、ずっとアフリカを追い求められたことを実感します。コロナ禍の制限が解除される中、早稲田らしく、多くのチャレンジを求める方々が当地にいらっしやることを祈念します。

渡辺浩平（2016年政経）

ボストンコンサルティンググループ（BCG）のナイロビオフィスで、民間企業や開発機関、政府などの公的機関を対象に、東アフリカ圏全体の発展に関わっています。また、ケニアのローカルチームで13人制ラグビーというスポーツを行っています。ナイロビは、「アフリカ」を強く感じつつも、世界中から人が集まる非常にエキサイティングな場所です。初めての方でも校友の先輩方が温かく迎えてくれます。興味のある方は、ぜひお越しください。

大嶽和樹（2021年法学）

法学部在学中の2011年、アフリカ縦断時に初めてナイロビを訪れ、5年後の16年、MBA留学中にナイロビを再訪しました。5年間で大きく変化した市場の可能性に魅せられて、17年3月、マッキンゼーの東京からナイロビに転籍。その後、バイクタクシーのオンライン配車サービスを提供するSafeBoda社の海外展開のHeadとして事業の立ち上げを経験し、20年末からオンライン中古車売買プラットフォームであるPeach Carsを創業しました。シリコンサバンナと呼ばれる東アフリカのスタートアップのハブにどっぷりと漬かる形で、国際色豊かなメンバーと共に事業を育てています。平均年齢が25歳以下と若く、これから人口も増え、都市化も進んでいくダイナミックな市場であるナイロビは本当に面白い場所です。早稲田の雑草魂が



2023年1月に開催された、早慶会新年会

ケニア稲門会について

2001年に「ナイロビ稲門会」が発足し、ケニアを訪問された森喜朗首相（当時）をお迎えました。その後、ケニア在住の校友で稲門会登録の機運が高まり、16年から「ケニア稲門会」登録準備を開始。17年にサハラ砂漠以南アフリカ唯一（当時）の登録稲門会として発足し、名誉会長には前身のナイロビ稲門会会長の小林俊一、会長には四倉佐知夫が就任しました。現在は、当地にて商工会長、日本人会長を歴任してきた高光明博が会長を務めています。会員は、ケニア在住の後、他のアフリカ諸国、インド洋諸国に移る者、また日本に戻る者もあり、広範なネットワークを持っています。そして、当地においてもケニア三田会と連携し、「早慶会」を開催しています。

伊藤正芳（1997年政経）



2023年5月、ケニアを訪問された岸田文雄首相と会長を囲んで

ケニアの魅力

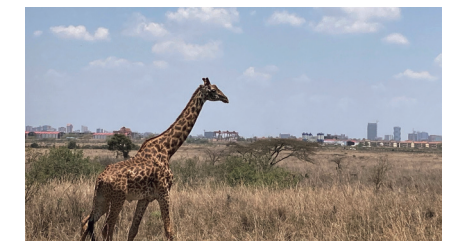
ケニアといえば思い浮かぶのは、豊かな自然やビッグ5と呼ばれるライオン、アフリカゾウ、パファロー、ヒョウ、サイ。たくましく生きるマサイの勇者や標高2,000メートル超えの地で鍛え上げられたマラソン選手たちでしょうか。

首都ナイロビにも国立公園がある、観光資源に恵まれたこの国は、それだけで私たちの心を強く引きつけます。しかし、ケニアの魅力は観光だけではなくありません。東アフリカ共同体（EAC）の中でも最大の経済規模を誇り、経済成長率は近年5パーセント前後と好調。首都ナイロビはEAC最大のビジネスハブです。また、インド洋岸のケニア第二の都市モンバサは、同地域主要港の一つで、その経済特区の開発を日本が支援しています。

2016年ナイロビにて開催された第6回アフリカ開発会議（TICAD）において、安倍晋三首相（当時）は「自由で開かれたインド太平洋（FOIP）」構想を掲げました。アフリカ大陸南東部インド洋岸は、このFOIP経済圏の西端に当たります。そして昨年には、岸田文雄首相がアフリカ歴訪4カ国のうちの1カ国としてケニアを訪問。わが国

とケニア、アフリカとの絆はますます深まりつつあります。来たる25年には第9回TICADが横浜にて開催されます。

伊藤正芳（1997年政経）



（上）ナイロビ国立公園。キリンとナイロビのビル群
（下）ビジネスエリア。空港へつながる首都高速道路